非論理的性格の悲哀

萩原朔太郎

青空文庫

白でないものは黒である。もし白でも黒でもないものは、中間の灰色でなければならない。これが論理の原則であり、我々の推理の方式は、いつでもこの前提の上に組みたてられる。

しかしながら多くの事實は、いつも人間の推理を裏切つてゐる。具體的なるすべての事實は、決して論理的であり得ない。特に我々の人格ほど、非論理的なものはないであらう。人格の實相は、實に矛盾そのものである。たとへばドストイエフスキイの著るしい特色は、變質者に特有なる非倫的・惡魔主義的の性向である。然るに彼の一面は、聖僧のやうに高潔で、處女のやうに純眞なる人道的な特質を有してゐる。故にこの一の人格は、惡でなく善でなく、白でもなく黒でもない。しからば善惡の中間たる、あいまいな灰色人物であるだらうか？　否、ドストイエフスキイの人格は、神と惡魔の著るしい對立から成立してゐる。そこには北極と南極とがある。そして兩極の調和たるべき、温帶地方といふものが全くない。即ち彼の人格は、白にして同時に黒、黒にして同時に白である。神と惡魔とは、いつも一の氣質の中に、或るふしぎな樣式で入り込みながら生棲してゐる。兩者は決して調和をせず、また妥協をもしてゐない。彼は白でなく黒でなく、また灰色の人物でもない。

同樣なる非論理的事實が、トルストイやニイチエや、その他の多くの藝術的天才に就いて觀察される。實に藝術家の本質的性格は、論理的矛盾の標本である。しかして偉大なる作家の性格ほど、より著るしい矛盾の對照を示してゐる。——げにあらゆる藝術的なものは、非論理的である。——やや平凡な作家と雖も、藝術家的氣質を有する限りには、多少の非論理性をもたないものはないであらう。ただ反省的の偏質をもたない限り、人は自ら自己の矛盾に氣がつかない。しかしてそれに氣のつくとき、人は決して幸福であり得ない。何となれば吾人の意志が、人格の合理的完成を欲して止まないから。トルストイの晩年に於ける悲壯な生活など、その著るしい例であらう。

ここに或る一人の人間が、いかに性格の矛盾にみたされ、且つ不斷にその反省で苦しんでゐるかといふことを、私の讀者に告げることも、あながち無意味ではないと思ふ。況んやその男は、多少文藝の才能を有してゐて、同情すべき人柄の男であるから。かりに私は、その人の名をSと名づけておく。もし讀者の中に、多少彼と共通する性格の人を發見し得ば、Sはいかに自ら慰められるであらう。

Sの生れたのは、田舍の或る小さな町であつた。彼の物質的環境は、比較的に平和で幸福であつたけれども、宿命的に生れついた偏質性が、早くから彼を不幸な人生に導いた。彼の長い生涯を苦しめてる、著るしい性格悲劇の發端は、實にその小學校の生活に始まつてゐる。小學校時代の思ひ出！　それは多くの人にとつて、無上に樂しい甘美な追懷であるだらうが、獨りSにとつては反對であり、耐へがたき憎惡に償するほど、暗く苦々しいものであつた。何故ならばSの生涯を誤らした、不吉な厭人的情操や病鬱的精神や、その他のもろもろの惡しき苗は、その學校生活の小社會的環境によつて、ひとへに育まれたものであるから。

しかし私は、ここでSの傳記を書かうと思ひ立つたのでない。實を言へば、環境が彼を惡くしたのでなく、彼の性格そのものが始め

からこの種の社會的環境と調節できなかつたのであつたらう。Sの性格は、既にその頃から調和できない矛盾であつた。或る教師は、Sに就いて次のやうな批評を下した。「極めて善良で、内氣で、正直で從順な模範的學生。」然るに別の教師は、常に反對な意見をもつてゐた。彼はSに對し、憎惡の感情をもつて言つた。「横著で、生意氣で、高慢で、反抗好きの不良兒童。」と。そして兩方の觀察とも、Sには適切に當つてゐた。

Sの學校の子供等は、その氣質や性癖やの著るしい對照によつて、二派のはつきりした黨派に別れてゐた。學業の成績から言ふならば、一方は「優等組」で、一方は「劣等組」であつた。性癖から言へば、一方は「温良組」で、一方は「不良組」であつた。またこの同じ對照を、氣質上から觀察すると、前者は「貴族派」と言ふべきで、後者は「平民派」と言ふべきだつた。即ち優等組・温良組に屬する生徒等は、人品的に氣位が高く、趣味が上品で、一般に高踏風の氣風をもつてゐた。これに對して劣等組・不良組の一派に屬する子供等は、人品が野卑で、ざつくばらんで、率直ではあるが賤しげだつた。

貴族組と平民組と、この二つの黨派に屬する生徒等は、互に敵視してにらみ合つてた。彼等の關係は、表面全く沒交渉のやうであつたが、内心では夫々對手の子供等を輕蔑し、氣質的に肌の合はない憎惡の感情をかくしてゐた。Sの學校の子供等は判然とこの兩派に別れてゐて、互に口を利き合ふこともしなかつた。然るに獨りSだけは、その兩黨のいづれにも屬しなかつた。ただ内氣の彼は、他から誘惑されるままに、或は貴族組の子供と遊び、或は平民組の子供と遊んだ。しかしSが貴族組の子供に混つて遊ぶとき、彼はたちまち孤獨を感じて、皆から仲間はづれになつてしまつた。何となればSの性癖には、どこかその連中と調和できない、もつとざつくばらんで野卑な氣持ちがあつたから。彼が何か發言するとき、いつもその仲間の子供たちが顔をしかめた。つまりSの性癖にまで、何かの貴族組らしからぬ、肌の合はないものがあつたのである。

しかしながらSが、平民組の子供等と遊ぶときは、それよりも尚一層不幸であつた。或る種の惡戲をしたり、教師に反抗したり、思ひ切つた率直の氣分を露出したりすることで、時に仲間らしい共鳴を感じてゐながら、氣質のどこかの隅に於て、全く肌の合はないものを感じてゐた。それ故平民組の子供等と一所に居る時、Sはいつも貴族組の子供の氣品をしたつてゐた。そして貴族組と遊んでゐるとき、平民組の子供の野性的な氣風にこがれてゐた。かくしてSは、あらゆる生徒中での仲間はづれであり、どんな氣質の子供とも親しめなかつた。彼の不幸は、單に孤獨であつたばかりでなく、氣質の毛色變りのために、理由なく憎まれて、迫害されたことである。即ち貴族組の子供は、彼等一流の傲慢な態度によつて、皮肉らしくSを嘲笑し敬遠した。そして平民組の子供等は、烏が旅鴉をいぢめるやうに、腕力によつて亂暴になぐりつけた。實際Sは立場が無かつた。學校の社會そのものが、彼には呪ふべき最惡であり、その殺風景なる建物は、彼を苦しめる牢獄の如く思はれた。

宿命的悲劇とも言ふべき、Sのこの非論理的性格は、彼が成長するにしたがつて、益　著るしく多角的になつてきた。氣質のあらゆる方面、趣味の至る所の傾向に、互に矛盾し反對する二つのものが、全然不調和に對立してゐることをSは明らかに自覺してきた。元來Sの體質は、膽汁質に屬してゐるため、氣質的に憂鬱の傾向をもつ

てゐるのに、その趣味は反對に陽快のものに向つてゐた。音樂でも、美術でも、演劇でも、すべてSの好きなものは、陽氣で、賑やかで、明るい氣分と色彩に充ち、多分の健康性をもつたものに限られた。暗く陰氣なものは、じめじめした暗鬱の氣分のものは、本能的に厭ひであつて、見向くことさへもイヤであつた。この氣質と趣味との、實に著るしき矛盾から、彼の個性的情操には、一種ふしぎなる色を生じた。たとへば彼の時々作る敍情詩は、思想的には憂鬱の内景をもちながら、言語の感覺や氣分の上では、むしろ陽快に近く明るい感じのものであつた。

Sの性格は、一方に全く哲人的のものであつた。彼は冥想を愛して、俗界の感覺的生活を賤しむ如き、超俗的高邁の氣風を持つてる人物である。しかも同時に、Sは純粹の俗物であり、感覺の快樂を追つて精神を顧みない、一の現實的人間主義者の如く思はれる。この前の性向が、彼に哲人の見得をあたへ、この後の性向が、彼に近代的藝術家の見得をあたへた。しかも彼の本質は、その何れでもないのである。そして勿論、また兩者の中間的調和でもない。ただ彼のいたづらに書く藝術が、ふしぎにその非論理な情操を表出してゐる。即ち「心靈的な内容」と「感覺的な氣分」とが、一の作品の中に竝立してゐた。

Sの趣味性の本體には、美の洗煉を悦ぶところの、高踏的、唯美派的の氣位がある。しかるにSの本性的氣質は、率直な野生を愛し、典雅を排して直情の流露を悦ぶ所の、眞の自由主義者なのである。この高踏的精神と野性的氣質。唯美主義と自由主義との、全く互に容れない矛盾が、いかにして一の人格中に同居してゐるだらうか？

そはやはり彼の藝術によつて語られてる。その藝術品は、或る高踏派的な情操をもちながら、形式は極めて野生的、民衆的のものであり、最も平易にして大膽なる自由主義の表現に訴へてある。

かくの如く、要するにSの性格は、徹頭徹尾矛盾にみちてる。二の反對する兩極が、いつも彼の中に對立して、非論理的なる情操を形象してゐる。このふしぎなる情操は、その非論理的なるにもかかはらず——否、非論理的なる故に——彼の藝術品の特殊な個性を構成してゐる。しかしながら統一は、ただ藝術品に於てのみ。生活上に於けるSの人生は、實に支離滅裂たるものである。彼のあらゆる性格悲劇が、いつもその點から出發してゐる。その性格悲劇は、彼の人生を破産しようと試みてゐる。彼の運命は、いつも弟子に裏切られ、愛人に怨恨され、世人に誤解され、しかして友人からは少しも理解されないのである。

讀者よ！　この非論理性格の所有者、Sの何人たるかは、既に諸君の推察したであらう如く、正に私自身である。今や私は、一個の貧しき文人として生活してゐる。しかも詩壇における私の地位、社會における私の地位は、かつて昔、小學校に於て經驗したる如く、全くそれと同樣であり、人生の初學に始めて知つた環境は、ずつと今日に至るまで、さらに少しも變つてゐない。私をして、常に永遠の敵と孤獨の中に生かしめよ！　私をして白でなく、黒でなく、またその中間色にも屬しない。一の斷然たる個性として生かしめよ！

青空文庫情報

底本：「萩原朔太郎全集　第八巻」筑摩書房
　　1976（昭和51）年7月25日初版発行
底本の親本：「改造　第七巻第十一號」
　　1925（大正14）年11月号
初出：「改造　第七巻第十一號」
　　1925（大正14）年11月号
入力：土屋隆
校正：きりんの手紙
2019年10月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

非論理的性格の悲哀

萩原朔太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/